



アテネの学堂とソロモンの指輪

今年度の学会年会は「ConBio2017」と銘打たれ、生命科学系学会合同年次大会であった。生化学会と分子生物学会が中心となり、35学会という多くの学会の協賛、というこれほどの規模の開催は初めてということで、ここからどのような新しいものが生まれていくであろうかと想像するとわくわくする。事前参加者もBMB2015より多くなったそうだが、これも、これまでに想像しないような新しさを自身の研究に得ようとする期待の現れであろう。研究のブレークスルーをいかに得るか。これは、研究者なら誰でも腐心するところである。これまでに生化学や分子生物学が動物学、植物学、微生物学、発生生物学、免疫学、と生命に関する広域な学問にブレークスルーを与えてきたように、それまでと異なる発想、技術に出会うことにより、新しい視点とその証明が可能になる。これはもうほとんどの方が確信していることだと思うのだが、それを実現していくには、どのような問題を乗り越える必要があるのだろうか。

実際に近頃は、学問領域をまたぐ優れた研究を見ることができ、*Nature* 誌、*Cell* 誌といったいわゆるトップジャーナルでも、自分の研究領域でこれまで解けなかった問題に、新しい手法でアクセスして答えを出しているといった論文にお目にかかることが多くなっているように思う。そういった論文に出会うと、タイトルとアブストラクトを読んだだけで、まず「おおっ」と素晴らしいものに出会える期待が高まるのである。内容を読み始めると、感動さえ覚えながら読み進める。だが途中でこれはどうやったのだろうか具体的に考えようと、メソッド欄をひっくり返してみる。昨今では大抵は長大な supplemental method を見ることとなる。そこでΣだとかの並ぶ数式がたくさん書か

れているのに遭遇する。かなりの数の生命科学者は、ここで高校か大学に入ったばかりの頃に習った、ほとんど忘れかけている知識に頼って読むではみるものの、真に理解することの困難さのため息をつくのではないだろうか。普段慣れ親しんでいる手法や発想ではない場合は、批判的に読む、などは望むべくもない状況に陥ることはめずらしくない。コンラート・ローレンツは、動物の行動を理解するのはよく観察することが「ソロモンの指輪」を手になることになる、という意味のことを述べているようだが、専門化の進んでいる現代では、異分野の手法、ましては発想を理解し、自分のものとするのは、相当にハードルが高いことなのである。

これが、実際に自分たちで行っている研究に異なる研究領域の発想や技法を取り入れようとなると、互いの領域の「言語」の理解齟齬は、より深刻である。もちろん、研究を進める上では異なる分野の専門家と意見を交換するわけで、こちらの側の理解不足は専門家の説明に頼ることができる。しかし、自分たちが解きたいと思っている問題、あるいは自分たちの領域にとってなにが重要なかを互いに理解しない限り、本当の意味での共同研究にはなり得ず、せつかくの互いの専門性が活かされないのではないだろうか。そのための「共通言語」は、各研究者が本気で「想像もしなかった新しいこと」を自身の興味に照らして取り入れ、その上で実際に議論を交わし研究を進めてみる、ということを経験に行うことで培われていくのだと思う。

ConBio2017のポスターで目にするプラトンとアリストテレスと同様、神戸では現代の生命科学の巨頭の議論を目に、耳にしたことだろう。探し求めていた異分野研究者と出会えたこともあるかもしれない。これらは本当に素晴らしいことである。しかし、ここからどのような研究を生み出していくのかには、各研究者が「共通言語」をいかに磨いていくのか、また、異分野間を橋渡しのできる分野の研究者がいかに増えていくのか、にかかってくるように思える。

(行徳俎)